

山田一成編著『ウェブ調査の基礎 ―実例で考える設計と管理』誠信書房（2023年）

タイトルは「ウェブ調査の基礎」だが、ウェブ調査を日々実践しているものにとって、ウェブ調査の最前線とも言うべき著作である。

調査の現場ではウェブ調査はすでに代表的な調査手法となっている。ウェブ調査は大規模サンプルを対象に低価格、短期間で実施でき、また、属性に応じて対象者を絞り込むことができ、さらに、調査票の回答画面に画像や動画、注釈などを入れられるなどレイアウトの自由度が大幅に拡充できる。

一方、デメリットとしては、インターネットの利用状況によるサンプルの偏りや二重回答などといった代表性の問題や、PC、スマホといった回答デバイスによる回答結果の違い、そして回答途中での中止などの問題があると指摘されてきた。

本書の目的は、こうしたメリットを活かしつつ、デメリットとして指摘されてきた点をいかに克服するか、その技術的な基盤を紹介、提供しようとしたものである。調査設計時の問題を具体的に取り上げて、今後の研究課題を示している。

労働組合の組織及び組合員を対象にしたウェブ調査の場合、対象組織及び対象者の属性をある程度把握して実施する。また、スマホの普及により個人調査ではほぼ回答デバイスは固定されるようになった。さらに調査対象者の大幅な拡大により、属性の事前把握とともにサンプルの偏りも大幅に修正されるようになった。

こうした点を踏まえて、ウェブ調査の実施においてきわめて注目すべき論点を本書より紹介すると、下記ようになる。

選択肢の作成において悩ましいのが「どちらともいえない」「どちらでもない」といった中間選択肢による調査結果の変化の問題である。この問題はウェブ、ペーパー調査にかかわらず発生しており、極端な選択を避ける日本人の特性により分析を困難にしてきた。この点を検討したのが第6章「調査回答における中間選択」である。しかし、ウェブにおける多様なチェックにもかかわらず未だ検討の余地が多く残された課題のようである。

スマホによる回答による回答の質の低下について検討したのが第9章「回答デバイスと回答の質」である。その結果、PC回答と比べスマホ回答の質の低下は確認できないとのことである。止められないデバイス進化によるゆがみは生じていないという結果は安心できた。

また、第10章「回答時間と回答中断行動」では、回答を途中で中断した人における中断時間の長短から生じる問題や、著しく早く回答を終える人と、回答を中断し長い時間をかけて回答する人とを比べた場合の回答の質について検討している。予想外に是正が必要なほどの問題はでていないようである。

ところで設問におけるMA（マルチアンサー）と個別強制選択形式（例：ひとつ選択）との間の問題について検討したのが第2章「複数回答形式と個別強制選択形式の比較」と第3章「複数回答形式と個別強制選択形式の比較」である。回答形式により項目の回答数の違いが出る点は調査実施者として見逃せない。できる限り多くの項目をあげて頂くのであれば、項目それぞれについて質問する個別強制選択形式が優位と思われる。しかし、「重要なものを」すべてあげてもらっては調査の意味がなくなる。違いを出すのであれば、3つ以内回答や5つ以内回答など選択数を限定した複数回答形式がベストかもしれない。

なお、「非常に満足」などの選択肢を5段階などで用意し選択してもらう回答方法（リッカート尺度）に対し、スライダー尺度の有効性を検討したのが第4章「両極型スライダー尺度の有効性評価」と第5章「単極型スライダー尺度の有効性評価」である。しかし、スライダー尺度は組合調査ではなじみがなく、また時系列比較の困難が生じるが、ウェブ調査の可能性の拡大という点では注目すべき手法といえるだろう。

いずれにしろ本書は、ウェブ調査を戦略的に進めるものにとって克服すべき多くの課題を提示しており、最前線の書籍として活用すべきものといえるだろう。（西村 博史）